



1 鬼神社

創建年代は不詳。社伝によると、延暦年間(782~806)、坂上田村麻呂が岩木山北麓の嚴鬼山西方寺觀音院を創立し、あわせて勧請した鬼神社が、のち現在地に移転したという。また伝説によれば、村人の弥十郎が、岩木山中で山の「大人(おおひと)」(鬼)と親しくなり、開墾した水田の水不足を話すと、大人は王余魚沢(青森市浪岡)から水を引き上げてくれた。村人はこれを「逆さ水」と呼び、大人の使った鋤や蓑笠を堂に納め、鬼神社としてあがめたという。明治6年(1873)、赤倉山鬼神大権現を鬼神社と改称し(社村)、明治14年(1881)に御社となった。

鬼沢集落は鬼を祭神としているため、今でも節分で豆をまかず、端午の節句にショウブを屋根に刺さない。旧暦1月29日には稻作の豊凶占いとして七日堂祭が行われ、また旧暦元旦には村の若者たちがまわし1本で大注連縄をかつぎ、神社に奉納する裸参りが行われている。

【鬼沢のハダカ参り】

鬼沢地区では毎年、地元住民が協力してトシナ(鳥居に飾る大しめ縄)を編み上げ、旧正月元旦に若者から壮年者の男性が集団で、鬼神社をはじめとする地元の社や祠にハダカ参りをし、トシナを奉納して、その年の豊作を祈願する。



津軽の七日堂祭は記録作成等の措置を構すべき無形の民俗文化財として国の選択を受けている。



2 大石神社

創建は不詳であるが、社伝によれば、慶長年間(1596~1615)に初代藩主津軽為信が十一面観音を勧請したことによる。津軽一統志によれば、本地は十一面観音、別当は百沢寺で、正徳5年(1715)に再建されたとある。「弘藩明治一統志」には、同年京都の吉田家より明神号が許されて大石大明神となり、常塔が再営され、享保4年(1719)には、第5代藩主津軽信寿が社伝を再建したという。明治2年(1869)大石神社と改称した。

3 赤倉神社

ここは行者が修行する聖地で、赤倉神社を中心に行き交う20余の堂社が点在し、さらに3分ほど山道を登った所に、1965年に建てられた小さな3重塔が見える。これらの諸堂の共通の祭神は童神・赤倉大神・弘法大師・不動尊で、ほかの諸神仏も混在し、民間信仰の複雑さが知られる。

4 瑞楽園

宮館地区的旧家対馬家の庭園として、明治23年から15年余をかけ高橋亭山が築庭し、亭山門弟の池田亭月が弟子外崎亭陽と昭和3年から同11年にかけて増庭した大石

6 大森勝山遺跡

岩木山の北東麓の大森川と大石川に挟まれた位置にある旧石器時代と縄文時代晩期を中心とする集落遺跡である。縄文時代晩期の大型竪穴住居跡と環状列石が発見され、一躍注目を集めた。県内では最初に発掘調査で発見された旧石器であり、旧石器文化研究の学術的意義をもつ重要な資料である。

7 砂沢遺跡

弘前市北部の砂沢溜池南岸に位置する弥生時代前期を中心とする生産遺跡。弥生時代の水田跡としては日本



最北、東日本最古のものとして著名である。今日の東日本初期弥生文化の生活の実態を知る上で、極めて貴重な学術資料である。



8 嚫鬼山神社

社伝によれば、延暦15年(796)、岩木山北麓に嚴鬼山西方寺觀音院が創建され、十一面観音を祀ったことに始まり、大同2年(807)、坂上田村麻呂が再建したと伝える。元禄7年(1694)成立の「百沢寺光明院縁起」には、寛治5年(1091)神託によって100の沢を越えて南麓に移り、百沢寺と称したとある。その旧地は嚴鬼山神社の地であった。社伝によれば、文安5年(1448)社殿が焼失したが、寛正4年(1463)に再建された。その後初代藩主津軽為信が修復し、慶長9年(1604)、その子信建が鰐口(県重宝)を奉納した。

もともと岩木山に対する信仰は、この社や鬼神社を中心とする北麓地域が中心だったと思われ、南麓の百沢寺に信仰拠点が移る以前の古い山岳信仰を残している。明治6年(1873)、嚴鬼山神社と改称した。

9 藤崎八幡宮

平安時代末期前九年の役で、源頼義・義家の軍勢に敗れた奥州の豪族安倍氏の遺児高星丸が藤崎城を築き、後に強大な力をもつ水軍を擁することとなる安東氏を興



した時、領内の鎮守として創設されたと伝えられます。社殿は藤崎城の土塁跡の斜面にあり、応永3年の板碑、安東氏顕末記、二十三夜塔などがあります。

10 鹿島神社

坂上田村麻呂が蝦夷の頭領・惠美の高丸の靈を退治した際に、守護神の鬼沙門天を祀る。また、境内には稀代の大名関大の里の風格を偲び、顕彰碑が建てられています。

11 堀神社

慶長14年(1609)、浅瀬石川から幹線水路である藤崎堀に、用水を引き入れる水口の堀根を完成させるために、自らの命を犠牲にして「人柱」となった堀八太郎左右衛門安高の靈を祀る神社です。

文化5年(1808)に建てられた堀神社嗣碑のほか、社殿には、堀八太郎郎左右衛門が人柱になる場面を描いた絵馬があります。

12 唐糸御前史跡公園

北条時頼の寵愛を受けた唐糸御前が藤崎へ落ち、時頼が津軽へ来た際に廃れた姿で再会する事を悲しみ、近くの沼へ投身したと伝わる。唐糸塚には延文4年(1358)の板碑があり、鎌倉時代の遺跡であると推察され、現在の藤崎斎場の場所が、「字唐糸」です。

13 水木城址

浪岡の北畠氏は顯家系統の浪岡御所と顯信系統の川原御所派に分裂、その川原御所の溝城・水木城である。永禄5年(1562)川原御所の乱で溝城館は落城、溝城氏はその後津軽為信に仕え、水木氏を名乗ることになり、文禄2年(1596)から溝城が水木と改められたとい。

14 藤崎城址

岩木川右岸に築かれた平城で、現在、本丸・二の丸は市街地となって原型をとどめてはいない。城内の鎮守であった八幡宮の境内付近に、土塁・堀跡が残る。前九年の役(1051~62)に敗れた安倍貞の子高星丸がこの地に逃れ、その子堯恒が寛治6年(1092)に築いたのが藤崎城といわれる。

15 三世寺板碑群

三世寺一帯は、鎌倉時代の鼻郡尻引郷であり、藤崎安藤氏の領地であった。そしてこの地には、天台宗三世寺が独立丘陵に館を構えていた。神明宮はこの館跡に位置し、境内に

7基の板碑がまとまるが、もとは付近一帯に散在していたものである。このうち5基は、鎌倉時代末期から南北朝中期までの紀年号を有している。文書史料の乏しい当地の中世の歴史を知るうえで貴重なものである。

16 文永の板碑

鬼沢字二千刈には、昔「石仏」という地名があったという。おそらく石仏と呼ばれた板碑があったからであろう。また二千刈の「刈」は、中世における田地の面積を表す単位である。これに刻まれた文永4年(1267)の年紀は、板碑のみならず金石文においても県内最古のものであり、その地名の由来も興味深い。